

P-2 ハルハ・モンゴル語の複数接辞 -UUd と接辞境界に現れる子音 n

山田洋平 (東京外国語大学) エンフアムガラン・オノン (東京外国語大学博士後期課程)
yamadabayar@tufs.ac.jp onon.sor2013@gmail.com

本研究では、ハルハ・モンゴル語の複数形を表す接辞 -UUd が名詞語幹に付されるときに語幹と接辞の間に現れる子音 -n の出現の実態についてコーパスと筆者の内省を用いた調査をするものである。結論として、複数接辞の直前の -n は「不安定なN」とは無関係に長母音・二重母音で終わる名詞語幹の後ろに現れるが、他の語では「不安定なN」と同様に出現に音韻的な環境の偏りはなく、また「不安定なN」が現れやすい語ほど複数接辞直前の -n も現れやすい傾向にあることを示す。さらに -n のない形式は慣用表現などで現れやすく、-n は比較的くだけた文体で使用が広がっているらしいことも示唆する。

1. はじめに

ハルハ・モンゴル語 (以下、モンゴル語) では名詞の複数接辞として -UUd がよく用いられる。この -UUd が名詞語幹に付されるとき、語幹と複数接辞の間に -n が現れることがあるが、これがどのようなときに現れるのかは十分に解明されていない。これはモンゴル語において数の範疇が必須のものではないと認識されているからであろう。本研究では、まず 2. において先行研究における複数接辞 -UUd とその直前に現れる -n について概観し、これと関連するモンゴル語の名詞に見られる形態的特徴の「不安定なN」についても概観する。先行研究の問題点を指摘した上で、3. ではこれを解決するための調査方法を示す。4. では音韻的環境、「不安定なN」との関係、その他、の順で調査結果とその分析を示す。5. で本研究のまとめを行い、今後の課題を述べる。

なお、ハルハ・モンゴル語とはモンゴル国の広域で使用されるモンゴル語の話し言葉を指すが、ここではこの話し言葉を反映していると思われる同地域の書き言葉が主な調査対象となる。以下ではこれを単にモンゴル語と呼ぶ。本研究における表記もこの書き言葉に基づき、これをラテン文字に転写して示す (a:a b:b v:w r:g d:d e:ye/yo ë:yo ж:ž z:z и:i й:j к:k л:l м:m н:n о:o ө:ö п:p р:r c:s т:t y:u ү:ü ф:f х:x ц:c ч:č ш:š ь:" ы:y ь:' э:e ю:yu/ү:ү я:ya)。接辞 -UUd に見られるような大文字表記は、母音調和による異形態 (-uud/-üüd) を有することを表している。また、先行研究の記述で -nUUd とされる形式について、ここでは形態素頭の子音 n が研究対象となることから -n-UUd と分析してとらえる。

2. 先行研究

2.1. “-nUUd”

モンゴル語における名詞の複数を表す接辞には -UUd のほか -d, -s, =nar やこれらの組み合わせがあるが、どの語がどの接辞を取るか、取りうるかは十分に明らかになっていない。このうち「さまざまな種類の名詞語幹に接続」(山越 2022: 220) するとされるのが -UUd である (1)。

(1) zil 「年」 複数形 zil-üüd šuwuu 「鳥」 複数形 šuwuu-n-uud

この接辞について先行研究では「-UUd / -nUUd」などという形で接辞の頭に子音 n のない形とある形 (本研究における -n-UUd) があると記述されていることがある。塩谷 (2007:50) は -nUUd を -UUd を「音韻的に条件づけられた異形態」であるとしつつ、「主に最終音節が長母音または二重母音で終わる名詞語幹に接続され」、「不安定なN」を持つ語幹や短母音で終わる語幹に接続することもあり、また -UUd との揺れが見られる場合もあるとしている (2)。小沢 (1994: 72) のように、子音 l や r で終わる語幹に -nUUd が接続されるとする指摘もある。

(2) mod 「木」 複数形 mod-uud ~ mod-n-uud (塩谷 2007: 50, 一部改編)

2.2. 「不安定なN」

前節でも触れたように -nUUd の一部は「不安定なN」を有する名詞語幹に付されるという記述がある。「不安定なN」とは、モンゴル語の一部の名詞が属格、奪格、与位格の接辞を伴うとき、または複合語の前部要素になるときに、その名詞語幹末尾に子音 n が現れる現象、あるいはその子音 n を指す。次の例 (3) では mor' 「馬」という語が奪格形や複合語の前部要素になるときに「不安定なN」が現れる (下線部) が、üxer 「牛」という語にはこれが現れないことが分かる。

(3) üxer 「牛」: 「不安定なN」無し mor' 「馬」: 「不安定なN」有り
奪格形 üxr-ees 「牛から」 morin-oos 「馬から」
複合語 üxer buu 「大砲」 morin xuur 「馬頭琴」 (山田 2022. 一部改編)

どの名詞が「不安定なN」を有するかは予測しがたく揺れもある。音韻的環境の面では語幹末尾に子音 n が (もともと) ある語に「不安定なN」が現れ得ないことを除けば、制限はないという

(Rákos 2015: 320)。辞書によってもどの語に「不安定なN」が現れるのか記述が一致しないが、ひとまずの標準として「正書法辞典」にはそれぞれの名詞につき格接辞を付した形が示されているので、「不安定なN」の有無を確認する参考になる。ただし、「正書法辞典」における記述も実際の使用実態を反映したものではないらしいことが山田 (2022) で示されている。

複数接辞 -UUd の直前に現れる -n の一部は「不安定なN」であるとする記述もあるが、全ての -n が「不安定なN」の表れと一致するわけではない。先行研究における -nUUd という形態素の捉え方は、これが「不安定なN」とは別物であるという見方の現れかもしれない。すなわち、「不安定なN」は名詞語幹に依存するものであるとみるのに対し、-nUUd は形態素の頭に現れた -n が形態素側に依存すると見る故の形式であるように思われる。

「不安定なN」が現れうる属格、奪格、与位格接辞の代表形を示す場合には、子音 n で始まる形態素を示さないことが多いのと対照的である。なお、モンゴル文字によるモンゴル語文語では、複数接辞として -Ud (母音始まり) と -nuGud/-nügüd (子音 n 始まり) という 2 種類の接辞形があるので、単にこうした伝統的な綴りを反映した記述である可能性もある。

2.3. 先行研究の問題点

モンゴル語の無数にある名詞がそれぞれ具体的にどの複数接辞を取りうるのかは不明のままであり、「正書法辞典」を始めとするあらゆる辞書類にも記載がない。音韻的、語彙的、意味的な使い分けを示唆されているが、いずれの先行研究でもいくつかの例を挙げるのみである。-UUd だけを取ってみても、直前に -n が現れる (“-nUUd” という形式を取る) のかどうかについては、音韻的、語彙的に条件づけられているとする記述や「不安定なN」との関連を指摘する記述もあるが、「揺れ」があるとする記述もあり、結局のところ具体的には分からない。

3. 調査方法

3.1. 調査の概要

本研究ではモンゴル語コーパスを用いて複数接辞 -UUd の使用実態、具体的には -UUd の前に -n が現れるのか否かを調べる。調査は主にコーパス上で色々な名詞に複数接辞をつけたときに -n の現れる語形と現れない語形を検索し、両方の用例が得られるならばどちらの検出数が多いか較べる、という形を取る。同綴異義語の判別を除いては用例の解釈などの子細な検討は基本的に行わず、モンゴル語母語話者としての話し言葉の文体の判断を加えるのみに留めた。

まず -n が音韻的に条件づけられるのかどうかを調べ、次いで「不安定なN」の有無と -n の現れに関連性があるのかどうかを検討する。最後に慣用表現や文体による -n の有無の使い分けを検証する。以下、コーパスについて 3.2. で、音韻的條件の調査について 3.3. で、「不安定なN」との関連性の調査について 3.4. で、慣用表現の調査、その他について 3.5. で述べる。

本研究で算出した数値は、基本的に小数点以下第三位 (表3では第四位) で四捨五入して示す。

3.2. コーパス

本研究で主に用いたモンゴル語コーパスは、東京外国語大学の CEFR-J x 28 というプロジェクトで Skech Engine 上に構築されている多言語コーパスの一部を成すものである。その総トークン数は 13,810,874 で、筆者の知る限りのモンゴル語コーパスの中で最大の規模のものである。内容はモンゴル語の小学校～高等学校で使用されている国定教科書とモンゴル語版ウィキペディア記事を集めたものであるらしい。規模が大きいことと、正規表現を用いた検索や出現数によるリストアップなどの機能がある点で、本研究での調査に適していると考え、これを使用した。以下では単にコーパスと記した場合、このコーパスを指すものとする。

筆者の見る限りこのコーパスに収録されているデータには大規模な重複も含まれているようであり、この点が修正されれば将来的には総トークン数がかなり減る可能性がある。本研究では、複数接辞の取る形の傾向を見るに際しこうしたデータの重複は大きな問題にならないであろうと考え、そのまま利用した。

複合語についてその複数接辞がついた形を調べるに際し、絶対数が少ないためコーパスでは用例を得にくいいため、補足的にグーグルを用いたウェブ検索も用いる。

3.3. 音韻的條件の調査

音韻的な条件について、先行研究には名詞語幹末尾が①長母音や二重母音、②子音 l, r, ③短母音である場合に -n が現れるとある。

①について、もし -n が現れるというルールが無いとすれば、モンゴル語の長母音や二重母音が

連続するのを避ける一般的な規則として子音 g が形態素境界に挿入されることが期待される。そこで長母音や二重母音で終わる語に -UUd がついて子音 g が挿入される例を検索する。

②は、r, l で終わる語幹の場合必ず -n-UUd の形が取られるのか、他の子音については同様のことが言えないか、あるいは単に傾向の問題だとしたら他の子音と較べてどうであるのか、それぞれ調査せねばならない。そこで任意の子音字 + -UUd / -n-UUd の各形式を含む語をリストアップすることで、名詞語幹の末尾の音によって使い分けの傾向があるのかを調べる。なお、直前の子音が口蓋化子音であることを表す ' という記号については、-UUd を付す場合に ' を削除して接辞を -iud という綴りにし、-n-UUd が付される場合には ' を i にするというルールがある。語幹末尾が口蓋化子音である語はあまり多くないので、口蓋化子音としてまとめて検索する。

③の語末の「短母音」とは、モンゴル語固有語の綴り上は a) 直前にある種の子音連続があること、b) 直前の子音 g が口蓋垂音であること、c) 直前の子音 n が歯茎音であること (短母音字や記号 ' が無ければ軟口蓋音になる) を表すものである。従ってこれらは音韻的環境という意味では、②と同様に語幹末尾の子音の問題として検証すべき問題である。-UUd が付されるときに語末の短母音字を削除するというルールがあるため、検索上は②の短母音字を伴わない語幹末尾の子音と区別がつかない。そこでコーパスから n+短母音字、g+a/o、その他の子音連続+短母音字が語幹末尾にある語をリストアップし、使用頻度の高い語を選んで調査対象とした。g+a/o については「不安定なN」の無い語と有る語を「正書法辞典」で調べてそれぞれ選び出した。

3.4. 「不安定なN」との関連性の調査

ある語が「不安定なN」を有するかどうかは、実用的には「正書法辞典」を見て確認することになるが、山田 (2022) では「不安定なN」の出現は辞書の記述とも一致せず、また揺れが見られることが示されている。そこで本研究ではまず山田 (2022) が「不安定なN」の有無について調査した語を改めて検証し、複数接辞の現れを見る。

山田 (2022) は東京外大言語モジュールの語彙モジュールから「不安定なN」が無いとされる語を中心に 129語について、ライブツィヒ・コーパスを用いて属格・奪格・与位格のそれぞれの形式を検索し、「不安定なN」が出る形が現れうるか調査したものである。山田 (2022) でも複数接辞についての言及があるが、いずれも検出数が小さいので改めて調査しなおす必要がある。

山田 (2022) の調査語彙 129語から、必要な取捨選択を行い、73語を調査する。取捨選択にあたっては、まず長母音・二重母音で終わる語、n で終わる語を除外し、-UUd の付された例がコーパスから得られなかった語 (語自体の頻度が低いもの、意味的に複数接辞を取らなそうなもの、語彙的に -UUd を取らないものなど) を除いて 75語を得た。以下では基本的に複数接辞 -UUd のみが付された語形の数だけを計上し、複数接辞のあとに格接辞や所属接辞などが付された例は数に含めなかった。念のためこうした格接辞や所属接辞のついた形も見たが、複数接辞のあとに格接辞のついた例しか得られなかった 2語については本研究に影響を与えないと判断して除外し 73語となった。

これに加え、コーパスの出現頻度の高い語をリストアップし、「正書法辞典」で「不安定なN」を有するとされる語を上位12語抽出し、これについても同様の調査を行った。

3.5. 慣用表現の調査、その他

3.4. で行った調査の結果、複数接辞の直前の -n の揺れが著しい語が得られたので、このうち zurag「絵」、ongoc「飛行機」、nom「本」、mod「木」という語について、実際に複数接辞を伴って使用された用例を検証して、その使い分けを分析した。用例の検証はモンゴル語母語話者である筆者 (オノン、モンゴル国ウランバートル市出身1987年生) が行った。

さらにこの過程で複合語 (綴り上は分かち書きされる。慣用的によく使われる語の組み合わせのことを指し、複合語とは何であるのかという厳密な定義は行わない) における複数接辞の現れに注目した。コーパスでは得られる用例に限られるので、ウェブ検索を行って用例数を算出した。

4. 調査結果

4.1. 音韻的条件

4.1.1. 語幹末尾が長母音・二重母音である場合

語幹末尾に長母音または二重母音があり、そこに複数接辞 -UUd が付されて形態素境界に挿入

子音 g が現れる例は、後述の 1例を除いて見られなかった。先行研究の記述通り「語幹末尾が長母音・二重母音である場合は複数接辞 -UUd の前に -n が現れる」のはほぼ間違いないと言える。ただし、唯一 xöšöögüüdijg {xöšöö-UUd-Yg 像-[複数]-[対格]}「像(複数)を」という例が得られた。ウィキペディア記事であり筆者(オノン)の内省では許容できないが、この語形(xöšöögüüd {像-[複数]})をgoogle 検索で探してみると若干の用例が得られる。xöšöö という語は辞書では「不安定なN」があるとされる語で、コーパス上も揺れなく「不安定なN」が現れている。期待される複数形 xöšöönüüd も 27例得られる(原形 xöšöö は1116例)。

4.1.2. 語幹末尾の子音ごとの傾向

コーパスで「任意の子音+nUUd」で終わる語を検索して得られた items (異なり語数) と total frequency (述べ語数) について、それぞれ「任意の子音+UUd」「任意の子音+nUUd」の合計数で割った数値を以下のグラフ(図1)にまとめた。任意の子音の前に最低1文字以上文字があることを条件に加えたが、その他の検索上のゴミを排除していない。例えば、「任意の子音+nUUd」の検索結果にはもともと語幹末尾に n を持つ語も含まれる。図中の i は口蓋化子音を指す。

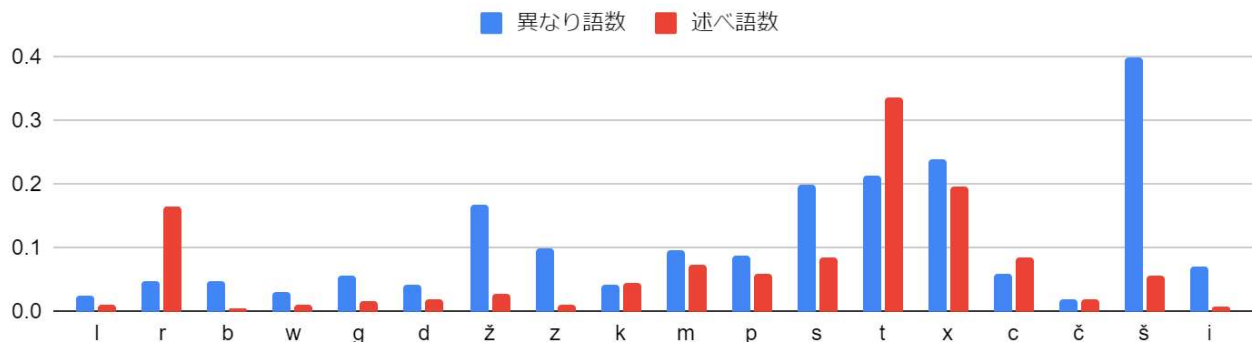


図1: 子音別複数接辞直前の -n の出現率

「不安定なN」は n 終わりの語に現れないが、同様に複数接辞直前の -n も現れない。f はこれで終わる語に複数接辞がついた例が得られなかった。このため、n, f はグラフ上から除外した。

異なり語数が突出する š は、子細に見ると少ない語数に綴りの揺れる外来語が含まれるため -n を含む語形の割合が高くなっている。ゴミを排除して計算し直すと比率は 0.19 ほどとなる。

同じく t も比率が高いが、多くが派生接辞 -tAn を含む語である(「「~を持つ者」を表す接尾辞 -tan で終わる名詞のほとんどは語尾 -yyd をと」る(向井 2006))。これらを除くと比率は異なり語数で 0.02、述べ語数で 0.01 となる。

r は述べ語数が異なり語数に較べ突出するが、これは ornuud ({oron-UUd 地域-[複数]}「諸地域」, {or-n-UUd 寝床-n-[複数]}「ベッド(複数)」) 1,240例が比率を引き上げているため、もしこの語を除くならば述べ語数の比率は 0.04 ほどとなる。

こうした調整をしていくと r, l が -n の出現率に関してとくに傑出しているようには見えない。s, x (次点 ž) が 0.2 前後で、他の子音より -n の出る比率がやや高いことが分かったが、各語の複数形の形式を予測できるほどではないようだ。

4.1.3. 語幹末尾が短母音字である場合

本節では、語幹末尾が n+短母音字である語、g+a/o である語、その他の子音連続+短母音字が来る語について、4.1.2. と同様に -n-UUd がついた語形の検出数を -UUd がついた語形と -n-UUd のついた語形の検出数の合計で割った数値を一覧にする。表1. は左から複数接辞のつかない語形、そのコーパス上の検出数、参考訳、辞書上の「不安定なN」の有無、-n の無い語形の検出数、-n の有る語形の検出数、その比率を示す。語幹末尾が g+a/o である語は上位10語を選出したが、その他が10語に満たないのは十分な例が得られなかったためである。

語幹末尾が n+短母音字である 7語全体で -n が現れる比率は 0.24、同様に g+a/o である語のうち「不安定なN」が無いとされる語では 0.00、「不安定なN」があるとされる語では 0.52、その他の二子音連続の後に短母音字が来る語では 0.34 であった。この数値を見る限り、4.1.2. で見た他の子音よりはやや数値が大きいことが見て取れる。

表1. 語幹末尾が短母音字である語に複数接辞がつくときの -n の現れる比率

	総数		-n無し	-n有り	比率		総数		-n無し	-n有り	比率		
šönö	1,054	夜		3	0	0	barilga	1,884	建物		343	0	0
xana	849	壁	N	24	15	0.38	myanga	1,628	千	*	0	4	1
čono	756	狼	N	0	29	1	alga	976	掌	N	1	0	0
xulgana	599	鼠		50	0	0	xarcaga	891	隼	N	6	0	0
bagana	458	柱		70	0	0	tamga	648	印鑑	N	6	4	0.40
cana	167	スキー		0	4	1	xaalga	555	ドア	N	15	25	0.63
žimsgene	140	ベリー		1	0	0	ayaga	503	椀	N	3	11	0.79
arga	10,323	方法		1176	0	0	čuulga	426	楽団	*	14	8	0.36
awarga	6,783	優勝者		785	0	0	xutga	269	ナイフ	N	0	1	1
darga	6,016	長		4	0	0	tarwaga	243	タルバガン*	N	0	6	1
utga	5,361	意味		446	0	0	xurga	154	仔羊	N	0	3	1
bajguullaga	3,906	組織		1954	0	0	öngö	3,332	色	N	77	38	0.33
bodlogo	2,951	政策		206	2	0.01	xöröngö	2,434	資産		14	0	0
zorilgo	2,338	目標		39	0	0	möngö	2,332	お金	N	4	8	0.67
udirdlaga	1,889	指導		268	0	0	alba	2152	公務	N	2	3	0.60

* 「千」は myangan という語形もあるが、「正書法辞典」には「不安定なN」に有無の記載がない。
 * 「楽団」は čuulga, čuulgan という語形があり、このうち前者は「不安定なN」無しとされる。
 * 「タルバガン」とはモンゴルに分布する齧歯目の動物で狩りの対象にされる。肉は食用だが現在禁猟。

4.2. 「不安定なN」との関連性

ここでは、「不安定なN」と複数接辞の前に現れる -n との連関について考察する。すでに先行研究でも指摘があり、また 4.1.3. の調査結果からも見て取れる通り、「不安定なN」と複数接辞の前に現れる -n とは必ずしも一致しない。

山田 (2022) において「不安定なN」が全く現れなかった 70語 (山田 (2022) ではこのうち検出数の少なかった 9語を除外し 61語のみ検証) のうち 41語を調査したところ、38語は -n の無い語形のみ検出された。残る 3例は bičig 「書」 (-n無し 90, -n有り 2, 比率 0.02), gutal 「靴」 (-n無し 2, -n有り 1, 比率 0.33), tülxüür 「鍵」 (-n無し 44, -n有り 4, 比率 0.08) であり、このうち bičig 「書」と gutal 「靴」は本調査によって若干「不安定なN」を有する格形式の例も得られた。

次に、山田 (2022) で (多くが「正書法辞典」で「不安定なN」が無いとされた語であるにも関わらず) 「不安定なN」がいくらか得られた残りの 32語について、複数接辞の直前に -n が現れるか否かを検証した。表2 の☆は、山田 (2022) における調査結果について、「不安定なN」が現れる語形の検出数を、現れる語形+現れない語形の検出数で割って得られた数値である。表中の語はこの比率の低い順に左上から並べてある。「-n無し」「-n有り」は -n を含まない語形、含む語形の検出数で、その右の「比率」が「-n有り」を「-n無し」「-n有り」の合計で割った数値である。

「不安定なN」の出る比率 (表2の☆列) と複数接辞の前に -n の出る比率 (表2の「比率」列) の相関係数を出してみると、0.76 と出る。これは一般に強い正の相関を見せると言えるが、そもそも個々の語の出現数が少ないために、単に2種類の比率が 0 と 1 に偏っていることに起因するのかもしれない。図2 のように散布図にすると、データが相当に分散しているようにも見える。

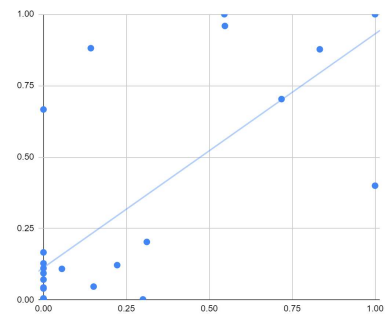


図2. 「不安定なN」と複数接辞直前の-nの相関

表2. 「不安定なN」が現れる比率と、複数接辞がつくときの -n の現れる比率の関係

	総数		-n無し	-n有り	比率	☆		総数		-n無し	-n有り	比率	☆	
uls	29865	国	1305	1	0	0.00	xöl	1732	足	7	2	0.22	0.12	
ger	7369	家	29		0	0.00	apparat	231	カメラ	10		0	0.13	
bül	2297	親族	22		0	0.00	cööröm	157	池	7		0	0.17	
cag	8486	時間	14	6	0.3	0.00	nom	4461	本	106	48	0.31	0.20	
xөгjim	2189	楽器	18	※		0.00	tawag	179	皿	2	※		0.43	
mark	528	切手	18		0	0.00	bal	432	ペン	0	3	1	0.40	
gar	4078	手	8		0	0.00	pjanz	62	レコード	2		0	0.67	
bičleg	827	書き方	75		0	0.00	üg	10099	言葉	N	22	56	0.72	0.70
sar	3994	月	13	※		0.00	bajr	4207	寮※	N	0	※	0.79	
šalgalt	457	試験	6		0	0.04	šil	746	ガラス※	N	1	5	0.83	0.88
asuult	1310	質問	69		0	0.04	bank	1230	銀行	N	84	14	0.14	0.88
zurag	13195	絵	247	44	0.15	0.05	awtobus	251	バス	N	2	※	0.92	
utga	5361	意味	141		0	0.07	xel	8002	言語	N	72	87	0.55	0.96
bije	9382	体	39		0	0.09	nüd	1083	目	N		18	1	1
em	1887	薬	34	2	0.06	0.11	šüd	390	歯	N		5	1	1
alčuur	122	タオル	1		0	0.11	jïms	959	果物	N	5	6	0.55	1

* すべて複数接辞のあとに他の接辞が何もついていない形を算出したが、「-n有り」に※を記した語は「他の接辞のついていない形は得られなかったが、格接辞などが付された形のみ得られた」ことを示す。
 * 訳語に※を付した2語は、多義語であり、語釈により「不安定なN」の有無が異なる語である。
 * 基本的に「不安定なN」を有さない語を調査対象としているが、一部の語には「不安定なN」がある。多義語 bajr を除くと、これ以外は皆辞書上の「不安定なN」の現れ方が特殊なものである。山田 (2022) ではこれを検証するために調査対象に加えている。本研究ではこうした現れの特殊性については問わない。

山田 (2022) は「不安定なN」が無いとされる語にデータが偏っているため、コーパス全体から出現頻度の高い「不安定なN」を持つ語も12語選出し、同様の検証を行った (表3)。

表3. 「不安定なN」を有する語に、複数接辞がつくときの -n の出現率

	総数		複数接辞 -n無し、有り			属格 n無し、有り			奪格 n無し、有り		
yum	79866	もの	N	0	14	1	11	199	27	27	0.856
xaalga	555	ドア	N	15	25	0.625	7	232	6	30	0.953
tereg	956	車	N	24	61	0.718	13	430		24	0.972
xel	8002	言語	N	146	224	0.605	36	4116	34	418	0.985
nüd	1083	目	N	0	97	1	8	719	4	83	0.985
ongoc	1681	飛行機	N	251	119	0.322	6	1355	10	57	0.989
mod	2541	木	N	28	35	0.556	8	1104	0	85	0.993
mor'	1395	馬	N	0	8	1	4	704	0	83	0.995
xon'	965	羊	N	0	4	1	0	335	1	17	0.997
us	6246	水	N	2	13	0.867	14	5044	0	277	0.997
xool	2824	食事	N	6	4	0.4	1	913	0	21	0.999
möngö	2332	お金	N	4	8	0.667	0	1003	0	26	1

表3の12語にはここまでの調査ですでに登場した語も含まれるが、ここでは複数接辞の直後に格接辞と再帰所属接辞が付されている語形も含めて数え上げ、「不安定なN」の有無については属格と奪格（とこれに再帰所属接辞）がついた語形のみに限って算出し（与位格形は、これと類似した他の形式と区別が付きにくいケースもあるため除外）、さらに比率の数値は小数点以下第四位で四捨五入して示す（表3）。表3からは、「不安定なN」が有るとされる語でも「不安定なN」の無い語形が現れること、これらの語につく複数接辞の直前には -n が現れやすいが、ongoc「飛行機」、xool「料理」のように -n の出現率が低い語もあるということが見て取れる。

4.3. 慣用表現、その他

これまでに見てきたように、複数接辞の直前に現れる -n には出現の有無の揺れる語が多い。そこでこうした揺れの大きな語から出現頻度の比較的高いものを 4 語ピックアップし、揺れの要因を探った。表4 はそれぞれ筆者の判断で頻用の慣用表現を選び、ウェブ検索を用いてその出現数を整理したものである。zurag「絵」、ongoc「飛行機」、nom「本」のように -n の比率が低い語では、単独で調査した場合に比して、慣用表現では -n が現れにくい。他方、mod「木」のように -n の比率の高い語では、逆に慣用表現で -n が現れやすいという傾向が見られた。ちなみに「正書法辞典」では ongoc「飛行機」、mod「木」は「不安定なN」が有る語で、他の2語は無い語である。

表4. 慣用表現における複数接辞直前の -n の出現比率の関係

	-n無し	-n有り	比率		-n無し	-n有り	比率
zurag「絵」	1050000	462000	0.31	nom「本」	600000	317000	0.35
xadny zurag 岩絵	4340	661	0.13	tüüxijn nom 歴史書	18400	737	0.04
gerel zurag 写真	326000	27200	0.08	mod 木	65000	336000	0.84
ongoc「飛行機」	528000	227000	0.30	süld mod クリスマスツリー	36	339	0.90
teewrijn ongoc 輸送機	3930	139	0.03	mönx nogoön mod 常緑樹	0	2070	1
nisex ongoc 航空機	36700	11800	0.24	nawčit mod 広葉樹	4	3860	1.00
cergijn ongoc 軍用機	3840	459	0.11	šilmüüst mod 針葉樹	5	3990	1.00

筆者の見たとおころでは、少なくとも ongoc「飛行機」と nom「本」に関して -n の現れる用例は話し言葉的で、くだけた文体に多いようである。慣用表現の取る語形が保守的なものだとすると -n の無い例が多い3語は -n の無い語形こそが古い形であり、これが話し言葉などで -n の有る形式に変わりつつあるのではないかと予想できる。

5. おわりに

複数接辞 -UUd の直前に現れる -n について、先行研究では「揺れ」があるとのみ説明されてきた。本研究ではコーパスを用いた計量的な調査によって、具体的にどの語にどの程度現れるのかを示すことができた。これは将来「不安定なN」研究にも資するものと思われる。その使い分けについては十分に解明できたとは言えないが、今後の課題としたい。

参考文献一覧

- 向井晋一 (2006) 「モンゴル語>文法モジュール>複数表現 解説」『東京外国語大学 言語モジュール』
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/031.html> (2023/05/07 確認)
- 小沢重男 (1994) 『モンゴル語四週間』第5版. 東京: 大学書林
- Rákos, Attila (2015) Stable and Unstable Nasal Stems in Khalkha Mongolian. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* Volume 68 (3), pp317-334.
- 塩谷茂樹 (2007) 『モンゴル語/リレハ方言における派生接尾辞の研究』大阪外国語大学研究推進室編集委員会
- 山田洋平 (2022) 「コーパスに基づくモンゴル語の『隠れたn』の研究」2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」口頭発表
- 山越康裕 (2022) 『詳しくわかるモンゴル語文法 [新版]』東京: 白水社

ウェブ上の辞書及びコーパス

- 「正書法辞典」: mongol xelnij zöv bičix dürmijn žuramlasan tol'. <http://toli.gov.mn/>
- 東京外国語大学言語モジュール・モンゴル語語彙モジュール: <http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/vmod/>
- ライブツイヒ・コーパス: Leipzig Corpora Collection: Mongolian (Cyrillic script) news corpus based on material crawled in 2011. Leipzig Corpora Collection. Dataset. https://corpora.uni-leipzig.de?corpusId=mon-cyr_news_crawl_2011.